News Letter　2014.11.10　第 60 号

たちばな

京都大学男女共同参画推進センター
Gender Equality Promotion Center

ジュニアキャンパスにゼミを提供

日時　　2014 年 9 月 21 日（日）10：30 ～ 12：00
場所　　京都大学男女共同参画推進センター
参加者　京都市およびその近郊の中学生

今年度も、京都市教育委員会との共催で、「京都大学ジュニアキャンパス」が開催されました。本事業は、中学生の皆さんに、学問の最先端を研究している現場に触れて、楽しさや面白さを感じてもらい、自分の興味のあることを深め、将来学びたいことを考えるきっかけを作ってもらうことをめざしています。今年度のテーマは、「君の興味の一歩先へ」です。法律、言語、理学、工学、医学など様々な分野から、実験、実習、観察といった体験型の授業や討論を通した授業などが行われました。

男女共同参画推進センターは、伊藤 公雄教授（文学研究科）と、センターのポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」の受講生 5 名（文、工、法、経済、農学部生）が講師となり、ゼミ「大学生と語るジェンダー（「男らしさ」「女らしさ」などの社会的性別）」を実施しました。ゼミには、女子 5 名、男子 4 名の中学生が参加しました。

はじめに、男女共同参画推進センター・特定教授の犬塚 典子先生から、センターの沿革や目的について説明がありました。

今年 7 月に移転したばかりの、新しいセンターの待機乳児保育室や支援室を見学した後は、伊藤先生による、「ジェンダーって？」の講義が行われました。

講義が終わると、2 グループにわかれ、ワークショップ「メディアのなかのジェンダー」を行いました。雑誌のなかの女性像／男性像を切り抜き、模造紙に貼りつけ、完成した作品を壁に貼り、男女の表現のされ方の違いについて観察・発見したことを記録し、グループごとに討論しました。

次に、海外で作成された動画「Like A Girl」を見ながら、大人と子どもそれぞれが思う「女らしさ」について、分析し意見交換しました。

最後は、中学生から、受験や進路、キャンパス・ライフなどについて質問を受けました。「なぜジェンダーについて学ぼうと思ったのか」という質問には、ほとんどの大学生が「自分の親やきょうだいとの関係の中でジェンダーについて考えるようになった」と回答していました。「受験の際に、自分の得意科目と自分の希望、どちらを優先して学部を選ぶのがいいか」という難しい質問もありました。文学部の学生が「自分は数学が得意だったけど、やりたいことは文学部の中にあったので文学部に進んだ。入学した今、文系なのに数学が得意ということが、逆に強みになっている。後から色々な可能性がある」と回答し、中学生は納得してくれたようです。他にも「サークル活動はどんなものがあるか」、「アルバイトはしているのか」、などさまざまな質問がありました。大学生も過去の自分を振り返り、互いに有意義なワークショップとなりました。

今後も、男女共同参画推進センターは、次世代向けの活動を継続していきます。12 月 23 日に開催する「女子高生・車座フォーラム 2014」においても、ポケット・ゼミ生がファシリテーションを行います。

第 12 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム

【日 時】2014 年 10 月 4 日 (土) 10:00 ～ 17:45
【場 所】東京大学駒場キャンパス 大学院数理科学研究科棟 大講義室 他
【全体テーマ】女性研究者・技術者を育む土壌 ～連携・融合による支援をめざして～
【主 催】男女共同参画学協会連絡会
【共 催】東京大学
【後 援】内閣府男女共同参画局、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、日本学術会議、科学技術振興機構

科学技術の分野において、女性と男性がともに個性と能力を発揮できる環境とネットワークを促進するために、2002 年に「男女共同参画学協会連絡会」が組織されました。応用物理学会、日本化学会、日本物理学会などが中心となって始まり、現在は、52 の正式加盟学協会、33 のオブザーバー加盟学協会によって構成されています。

「女性研究者の採用促進に関する他国の政策と効果の調査」「研究者のワークライフバランス」などのワーキング・グループ活動によって、アンケート・調査、提言、シンポジウムなどが実施されています。第 12 期になる今期は、日本数学会が幹事となり、東京大学駒場キャンパスにて、10 月 4 日（土）に「第 12 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム」が開催されました。

午前に二つの分科会「女性技術者の働き方ー意識・組織・制度ー」（担当：日本技術士会・土木学会）、「同居支援への支援案の模索」（担当：日本植物生理学会・日本植物学会）が行なわれ、午後の全体会議Ⅰでその内容について報告がありました。また、板東久美子消費者庁長官より特別講演があり、スーパーグローバル大学トップ型 13 大学の女性研究者比率の目標が紹介されました。

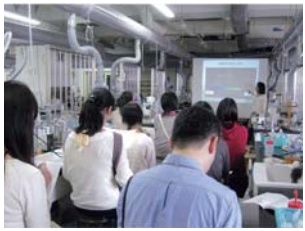
学協会と研究機関によるポスター・セッションをはさんで、全体会議Ⅱでは、パネル討論「男女共同参画学協会連絡会の要望書の具現化に向けて」が行なわれました。2014 年 4 月に完成した要望書に基づき、①女性リーダーの育成（女性リーダー・イノベーション拠点）、②研究者のワークライフバランス基盤の定着、③女性研究者・教員割合の数値目標設定の促進とデータベース化、④次世代を担う女性研究者の育成、⑤国際的ネットワーク形成の推進支援、を具現化していくため、今後行なっていくことについて、フロアも交えて活発な議論が展開されました。

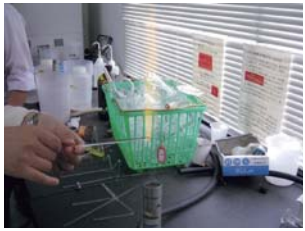
最後に、第 13 期の幹事となる日本植物生理学会の会長である西村いくこ・京都大学理学研究科教授より、次期の活動、シンポジウム（2014 年 10 月 17 日：千葉大学けやき会館予定）について報告がありました。

女子中高生のための関西科学塾
ＪＳＴ女子中高生の理系進路選択支援プログラム

女子中高生のための関西科学塾は、独立行政法人　科学技術振興機構「女子中高生の理系進路選択支援プログラム」としての委託を受けて、毎年、関西の大学が協力して実施しています。第９回となる今回は、大阪府立大学が中心となり、神戸大学、大阪大学、奈良女子大学、京都大学、大阪府立産業技術総合研究所、花王（株）との大規模な連携を基盤に、科学の面白さを体験できる科学塾を６回開催します。

10 月 12 日（日）には、京都大学で、女子中学生を対象に、実験などの取り組みが行なわれました。





■日程Ｃ　京都大学での実験一覧

	講師	テーマ
1	後藤 忠徳	地下を〝掘らず〟に探ってみよう！
2	吉村 一良	高温超伝導の不思議～超伝導に触れてみよう～
3	宮崎 修次	カオス・フラクタルの世界を知る
4	落合 久美子・間藤 徹	植物細胞壁のひみつ
5	原田 慶恵	DNA を顕微鏡で観察してみよう
6	馬場 正昭	「にじいろ」を見よう
7	幡野 恭子	生物のミクロの世界を実体験！～身近な微生物を光学顕微鏡・電子顕微鏡で観てみよう～
8	渡邊 裕美子	大文字山を歩いて巡る〝地球科学〟
9	成瀬 元	水と砂が作る形と模様
10	前川 真吾	みてわかる生物学ークラゲの蛍光タンパク質で生命をみるー

連載：研究者になる！－第51回－

自分なりの研究者像を模索しながら

高等教育研究開発推進センター・准教授　　田口 真奈

ついに、このコーナーの執筆依頼が回ってきたことを、第一回目の執筆者であった同僚教授に伝えると、「田口さんなんか、ネタ満載でいくらでも書くことあるでしょ！」と言われた。そうかもしれないけれど、さて、何を書けばいいのやら。後輩女性研究者が一番目を輝かせて食いついてくるのは「結婚ネタ」なのだが、ここでは文字通り「研究者になる」までについて書いてみようと思う。

強い意志をもって研究者になったわけではないが、「働く」ということについては、強い意志をもっていた。もっと正確にいうと、私はずっと、「働くお母さん」になりたかった。今は亡き母がそうであったからだと思う。もっとも、大学生の時には、「働く」ことも「お母さんになる」こともこんなに大変だとは思ってもみなかった。まず、お母さんになるためには、「この人となら」と思う人を見つけ、子を授からなければならない。両方とも、自分の努力だけでなんとかなるものではない。また、職を選ばないのであれば「働き始める」ことは比較的たやすいが、「働き続ける」ことはとても難しい。これもまた、特に子どもができてからは、自分の能力や頑張りというより、条件が整うかどうかによるところが大きい。私が現在、6歳の娘、1歳の息子をもち、会社員の夫と同居し、理解ある義母や保育園や隣人に支えられて、尊敬できる同僚とともに教育研究に邁進させていただけているのは、ひとえに運がいいからである。

就活の時期を迎えて、「働くお母さん」になるためには「子どもがいるというハンディをもっていても欲しい人材になっていないとダメなんだ」と強く思い、そのときに「これと誇れるもの」をもっていない自分に気づいて大学院への進学を決めた。ただ、当時所属していた大阪大学教育技術学講座の研究室には、学会長をはじめとする、立派な研究者がたくさんおられたので、自分が「研究者」になれるとは到底思っていなかった。だから、修士課程在籍中に、資格をとった。所属学部で取れたのは、中学校と高校の教員免許。小さい子が好きだったから、幼稚園教諭の免許をとりたかったが、自分の大学ではとれなかった。そこで学科試験と実技に合格すればとれる保育士の資格をとった。

修士課程に進み、講座のプロジェクトに参加させていただき、学会デビューをすると、視野が研究室の外にも広がった。学部時代には初等中等教育の授業研究をしてきたが、研究の蓄積があまりない（ように当時見えた）幼児教育に携わることは、やりがいがあることのように感じて、保育士の資格をもってアルバイトも始めた。「現場」に入れば、「これだ！」と思える幼児教育に関する研究テーマがみつかるかも、との甘い期待があったのだが、オムツを替えているうちに終わってしまった。大阪大学には幼児教育を専門にしている講座がなかったために、大阪教育大学の先生のゼミに通わせていただいたりもしたが、いいテーマをみつけることができず、結局、修士論文のテーマとしたことをそのまま博士論文でも追究することにした。

当時は、初等中等教育におけるメディア教育を研究対象とする研究室にいたが、私はその中で「映像視聴能力」をテーマにしていた。博士論文執筆の過程で、単に「テレビ番組の理解」ということを越えて、人が「見てわかる」とはどういうことなのかを知りたいと思ったが、その関係領域の広さに、茫然とした。と同時に、「これが研究か」と面白さも知った。「今の自分では扱いきれない」ことを素直に認め、「範囲を絞る」ことも学んだ。また、狭い領域ながら「自分が日本で一番詳しいのかも」と思えることができたことは（それがほんのささいな領域であっても）、自信にもなった。

博士号取得の過程もネタ満載だったのだが、紙幅の都合上カット。

ともかく、無事博士号を取得した。が、取得しても就職はない。たまたま知り合いが訪問するというのに便乗して訪ねたゼミが、今いる職場の前身であった。そこで「大学教育」が研究領域になることを知った。研究の蓄積がないのは幼児教育以上。これは面白いと思った。研修員やら、関東での就職やら、ハーバード大学での在外研究やらを経て、現在に至る。

助教時代に再会した高校の同級生が、「自分の研究は、うまくいけば、生物の教科書の記述がちょっと変わるかなっていう研究」と教えてくれたことがあった。率直に「すごいな」と思い、そういった領域に憧れをもった。同時に、不公平だな、とも思った。なぜなら、そのとき、私はすでに職を得て、科研費もいただいていたのに対して、友達は不安定な身分のままだったからである。そのときに、思った。私はノーベル賞をとるような研究者にはならないけれど、そういう人材も育つような環境づくりに貢献できたらと。それはそれで必要ではないか、と。いろいろな研究者がいて、いろいろな領域がある。私は、運命が導いたこの場所で、できることを精一杯やろうと思っている。

Gender Equality Promotion Center

〒606-8303　京都市左京区吉田橘町
電話　075（753）2437
FAX　075（753）2436
E-mail　w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP　http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/